教会は「祈りの家」 コロサイ4:2~6

旧約時代から神の宮、神殿における礼拝において神を崇め、祈りを通して神との交わりを持っていたことから神の宮は「祈りの家」と呼ばれました。「わたしは彼らを、わたしの聖なる山に連れて行き、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。彼らの全焼のいけにえやその他のいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれるからだ。」イザヤ書 56 章 7 節 そしてそれは今、キリストのからだなる教会のことを意味します。

キリストのからだなる教会を建て上げるうえで祈りは最も重要な人がなすべき業なのです。そのことからパウロは、今日の箇所から祈りに関して三つのことを教えています。第一に「祈りなさい」、第二に「祈ってあげなさい」、そして第三に「祈ってもらいなさい」です。この三つを順に考えてみましょう。第一の「祈りなさい」というのは、自分のために祈るということです。

多くの人は、クリスチャンになってはじめて、ほんとうの祈りをするようになったことと思います。それまでは初詣で「家内安全」、「商売繁盛」、「無病息災」などを心に念じたり、神棚や仏壇に手を合わせるようなことがあったとしても、朝に、夕に、また、ことあるごとに神と語り合うような祈りはなかっただろうと思います。クリスチャンになってはじめて、確かな祈りが生活の中に入ってきたのです。最初のうちは、日ごとに祈る、ことあるごとに祈るということがなかなか出来なかったと思いますが、信仰生活を続けていくうちに、祈りが生活の一部となり、生活の指針になってきたと思います。

皆さんはどうやって祈れるようになったでしょうか?私自身は教会でどこでも熱心に祈る人達を通じて覚えていったように思います。教会が「祈りの家」になるのは、そこに、「祈りの人」がいるからではないでしょうか?好むと好まざるにかかわらずこれから教会を通して信仰を持たれる方は今おられる方々から祈りについて学んでゆくのです。

祈ることに関して聖書は「目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい」と教えています。「たゆみなく祈る」というのは、何もしないで一日中祈っているということではありません。できるかぎり多くの時間を祈りに費やすことができたら、それは素晴らしいことですが、職場で時間を縛られている人たちには、とても難しいことです。主婦は家にいて、時間があると思われがちですが、家庭の仕事は、やりだせばきりがなく、家庭という職場で働く主婦の勤務時間はほとんど丸一日と言ってよいでしょう。

しかし、祈りはたんに時間があるからできるというものではありません。何よりも祈る以上、そのことに真剣に、コミットメント(責任もって関わること)がなければ出来ないことです。これは、逆に言えば、コミットメントがあれば、たとえまとまった時間を取れない人でも祈ることができるということです。 宗教改革者ルターは「今日はいつもよりやるべきことが多いのでいつもより祈ろうと」いったとされます。ですから、「たゆみなく祈る」というのは、コミットメントをもって祈ることが、たゆみなく祈るということになります。たんに言葉を連ねるだけの祈りではなく、もっと神を知り、神とまじわり、神のみ声を聞く祈りへと成長していくことです。やがて祈りが生活の一部になるだけでなく、こんどは生活全体が祈りになっていく、そのことを目指していきたいと思います。「祈りはクリスチャンの呼吸である」と言われます。 意識して呼吸する人はいません。例外的に喘息の時は呼吸もちょっと気を付けないといけませんが。良い意味で祈ることに慣れてくるとどんな難しい問題でも先ずは神様に聞くという姿勢がある限り、神様は答えを与えてくださいます。

第二は「祈ってあげなさい」です。これは、「とりなし」のことで、誰か他の人のために、その人になりかわって祈ることです。使徒パウロが書いた手紙には「私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私

たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています」(コロサイ 1:3)、「こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて、あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています」(エペソ 1:15-16) などと書かれています。パウロは、使徒として、諸教会のために祈っていました。それで、パウロはエペソ 6:18 で「すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい」と教えているのです。使徒たちはみな祈りの人であり、とりなしの人でした。

パウロは、コロサイのクリスチャンに、自分のために祈るように願い、また命じています。コロサイ4:3に「同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください」とあります。ここで「同時に」と訳されていることばは「それと共に」という意味があります。自分のために祈るのと「同時に」、多の人のためにも祈ってあげなさい、自分のために祈る、「それと共に」他の人のことをもとりなし祈りなさいというのです。この言葉は、自分のために祈ることと、他の人のために祈ることは、同時になされることだということを教えています。

クリスチャンになって祈りはじめた最初のころは、自分のことしか祈れなかったかもしれません。しかし、だんだんと、自分の家族のことからはじめて、教会のメンバーのため祈れるようになります。さらに、自分の住む地域のため、日本の、世界のためと祈りの輪をひろげていくことができます。

「主の祈り」では、神を「天にいます私たちの父よ」と呼び、「われらの日ごとの糧をきょうお与え下 さい」と祈ります。決して「私の…」、「私ひとりの…」ではないのです。このように、主の祈りは、自分 のために祈ると共に、他の人のために「祈ってあげる」、他の人と連帯して祈ることを教えています。他 の人のために祈るとき、これを覚えることは大切です。とくに、私たちが他の人の欠けたところのために 祈るとき、主イエスが「私たち」をと言って祈れと言われたことを忘れ、「あの人たち」という思いで祈 るなら、それは他の人のために祈っているのではなく、他の人を祈りを使って批判していることになる かもしれないからです。「神さま、私の信仰は大丈夫ですが、あの人たちは間違っています。それを正し てあげてください」、「私の国は自由で平等だけれども、あの人権を無視する国をかえりみてください」な どといった祈りは、あのパリサイ人が、取税人を見て「神さま、私が、あの取税人のようでないことを感 謝します」と祈ったのと同じような祈りになってしまいます。イスラエルの大祭司はイスラエルの罪の 責任を自分の身に負って、とりなし、その贖いのために犠牲をささげました。まことの大祭司であるイエ ス・キリストは、人々の罪のためにとりなし、神の子羊となって十字架の上でご自分をささげ、それによ って罪の赦しを勝ち取ってくださったのです。日ごとの必要を祈るとき、「私の」ではなく「私たちの」 と祈るように、罪の赦しを願うときも、他の人の罪を自分の罪であるかのようにして、赦しを願い、とり なしていく、そのことを主イエスは教え、身をもって示されたのです。「あの人の」罪ではなく「私たち の」罪として、罪を悲しみ、悔い、赦しを求める、また、あの人の成長ではなく、自らも含めて「私たち の」成長を求めて祈る、それがほんとうのとりなしの祈りです。

第三は、「祈ってもらいなさい」です。

パウロは、コロサイ 4:3 で「同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。と言いました。これは、「祈りなさい」という命令でもあり、また「祈ってください」という願いでもありました。伝道のために祈るのはクリスチャンの義務です。ですから、投獄されて伝道できないでいるパウロが自由になり、再び伝道できるように、しかも、パウロが反対者を恐れず、「キリストの奥

義」を大胆に、明確に語れるように祈るのは、クリスチャンの、また教会のなすべきことでした。実際、 使徒ペテロがユダヤの最高議会に逮捕されたとき、教会は共に集まって彼のために祈り、釈放されたと きには「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてくださ い」(使徒 4:29) と祈りました。ペテロがヘロデ王によって投獄されたときには、「教会は彼のために、 神に熱心に祈り続け」(使徒 12:5) ていました。

けれどもパウロは、ここで「祈りなさい」と命じるだけでなく「祈ってください」と願っています。さきほど触れたように使徒パウロは、諸教会のためにいつも祈り、文字通りすべての聖徒のために祈ることができた人でした。おそらく、パウロのもとには、「私のために祈ってください」と言って、パウロに祈ってもらうため、大勢の人が毎日つめかけていたことでしょう。パウロは、強い信仰を持ち、聖霊に満たされた人でしたから、他の人がパウロの祈りを必要としていても、パウロは他の人から祈ってもらう必要がないと思われていたかもしれません。しかし、祈ってもらわなくて良い人など、この世界に誰ひとりいません。パウロのように大きな働きを任せられた人であればあるほど、多くの人の祈りが必要なのです。自らが本当に祈る人は、他の人から祈ってもらうことがどんなに必要なことかを知っているのです。

「私たちのために祈ってください。」これは謙虚なことばです。そしてまた、力強いことばです。私たちは「たゆみなく祈りなさい」と教えられていますが、時として祈れなくなってしまうことがあります。祈っても、祈っても、何の答えもないように思えるとき、「祈っても何も変わらない」とあきらめてしまうことがあります。「たゆみなく祈る」どころか、「祈ったり、祈らなくなったり」の状態に陥ります。それがしばらく続くと「祈ったり、祈らなかったり」が「祈らなかったり、祈らなかったり」ということになるかもしれません。そんなときどうしたら良いのでしょうか。他の人に祈ってもらえば良いのです。とりなしを願えば良いのです。私たちのために祈ってください。私はということば自体が祈りだと思っています。私たちがどう祈ったらよいかわからないときも、聖霊は「いいようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなして」(ローマ8:26)くださるお方です。聖霊の深いうめきのひとつがなのかもしれません。聖霊が私たちのうちに働き、主イエスが天でとりなし、そして、神がこの世界のすべてのものを働かせ、私たちのために最善をなしてくださるのです。そして、とりなしの力により、自らも祈ることができるようになっていくのです。

「祈りなさい。」「祈ってあげなさい。」「祈ってもらいなさい。」この三つのことを、この週も励みましょう。